

ことを知つたが、期する所あつて自家に歸り、専心讀書研鑽を積み、著書數十の多きによつた。就中假名聖教典語考最も名高く、文政六年法主から護念寺の寺號を免許せられた。蓋し學識によつて寺號を免許せられたものは前後唯惠見のみであるといふ。天保十二年七十九歳で寂した。

**エゲンジ 惠眼寺** 鹿島郡小島に在つて、曹洞宗に屬する。永和元年瑞巖留麟の建立。天正十八年前田利家の側室壽福院の周旋に因つて今の寺地を受けた。

**エコウ 慧剛** ↓キンレイエコウ 金嶺慧剛。

**エコウイン 慧光院** 大聖寺藩主第十一代前田利平の子綱吉郎の法號。詳しくは慧光院眞藏宗法童子。

**エコウジ 惠光寺** 金澤堀川間、町に在つて、眞宗東派に屬する。もと河北郡長柄村に居たといふ。

**エコウジ 惠光寺** 羽咋郡領家町に在つて、眞宗東派に屬する。もと同郡小室村に居た。

**エサキ 江崎** 鳳至郡阿岸郷に屬する部落。

**エサン 江指** 能美郡輕海郷に屬する部落。郷村名義抄に、宇津呂丹波の臣御指某の居た所であるとする。

**エサシイシ 江指石** 能美郡江指から産する石材。石英粗面岩質凝灰石で、帯灰白色石基中に帯綠色短冊形物質を混じり、蛙目をなし、稍硬い。

**エシユン 惠俊** ↓ハビアン 巴比彥。

**エシヨウ 慧照** ↓ダイヨウエシヨウ 大用慧照。

**エシヨウイン 慧照院** 加賀藩主第十代前田重政の側室林氏の法號。詳しくは慧照院眞室妙宥日淳大姉。

**エシヨウジ 惠照寺** 江沼郡中代に在つて、眞宗東派に屬する。明治十二年三月寺號公稱を許された。

**エジヨウボウカイゼン 惠乘坊快全** ↓キタムラエジヨウ 北村惠乘。

**エジリナリアキラ 江尻成章** 通稱雄左衛門、諱は成章、翁松と號し、鳳至郡門前の人である。家は代々總持寺の代官役であつた。成章性秀拔洒落で、朱學に深く、皇典に精通した。嘗て笈を京師に負ひ、頼山陽の門に遊び、その日本外史の著あるや、考證編纂の事に興り、成るに及んで歸郷した。後家業を繼いだが、固より崇佛を好まなかつたから、早く職をその子に譲り、徒を集めて教へ、或は能越に書を講じ、悠遊自適した。成章又漢詩に長じ、一時の名流摩島松雨・藤井竹外・宮原小竹等と徵逐する所があり、慶應元年十月五日家に在つて歿した。年七十一。著書に皇系漸移纂疏、名家續纂疏がある。

**エスウ 慧崇** ↓ムトウエスウ 無等慧崇。

**エソ 江會** 鹿島郡江會郷に屬する部落。古郷の越蘇の遺名で、越登賀三州志の來因概覽に、『倭名鈔能登郡古智郷名に越蘇あり。又頼朝公より文治二年長谷部信連へ賜る下し文にも越蘇あり。按ずるに、越蘇は蝦夷の轉唱にて、今鹿島郡の江會郷江會村、古へ越の蝦夷の住せし地成べし。』と論じてから、後世多く之に雷同するものがある。しかし、蝦夷の古訓はエミシ又はエビシで、エゾではないから、蝦夷在在の地にエソの名を遺す道理はない。

**エゾアナ 蝦夷穴** ↓エゾノイハヤ 蝦夷の岩屋。

**エゾアナ 蝦夷穴** 鳳至郡杉平の内の小宇。

**エソイン 越會院** 能登一宮氣多神社の正月吉書始神前讀上文に越會院司の語がある。鹿島郡江會に往昔神領があつて、越會院と稱したことがあるのであらう。

**エソエキ 越蘇驛** 能登の古驛。惠會と訓むべきこと郷名に同じく、大同三年紀に能登郡越蘇驛を廢すとあるもの即ち是である。兵部式に越蘇驛を載せたのは、大同の後再置したものであらう。今の鹿島郡江會に當る。

**エソガハ 江會川** 鹿島郡江會の山より發し、西北に流れ八幡に至り、北流して御藏川に合する。

**エソゴウ 越蘇郷** 鹿島郡に在つた。越蘇は和名鈔所載の古郷名で、保元三年十二月三日の石清水田中家文書には、能登國惠會・飯川保一・青莊共に八幡宮寺領となつて居る。又承久三年注進の能登國田數目録には、『越會郷、四段、承久元年檢注田定』とも見える。後世亦江會郷を存する。

**エソゴウ 江會郷** 鹿島郡に屬し、藩政時代では、江會・中挾・若林の三ヶ村を含んで居た。

**エゾノイハヤ 蝦夷の岩屋** 蝦夷の岩屋は鹿島郡能登島の須會にある二個の古墳石室で、その雌穴と稱するものは半ば破壊せられたるも、雄穴は略完全である。之に就いては能登名跡志に次の如く記されてゐる。『此村に蝦夷の岩屋とてあり。昔蝦夷の大男とて、異人の在し洞といへり。亦別所村とて、山の中に一村有。此村へ行道に、牛の爪坂と云てあり。是に蝦夷の大男の手の跡とて、石に在。又須會村に衣川と云あり。蛙の魚多くあがりしを、蝦夷の大男取て食物にせしに、或時臥り行者來り、大男にさけの魚をくれと有しに、大男惜みて得させず。其時行者、きのふきてけふもきて見る衣川すほころびてさけもあがらず。斯くありければ、其後蛙一尾もあがらず。彼大男食物に飢て、蝦夷島へ行しと云へり。』臥行者は泰澄の侍者で、能登島の産であるところの地方ではいふが、その詠歌は奥南盛風記に、『天正十九年秋冬の比、難部の夫のもの、催されて衣川に至りけるによめる。きのふ立ちけふきて見れば衣川裾ほころびてさけのほるかな。』とあるものと出自を同じくする俚談で、假りて臥行者の法力を讚歎するに過ぎぬ。蝦夷の岩屋が古墳である上は、そこに蝦夷がゐたといふことも信じ得ぬ。但しそれとは別に、大化の頃越後の中部以北に蝦夷が居たといふから、それより古き時代に、越中若しくは能登・加賀にも、彼等の棲息したことは、推考しても誤がなからう。

**エゾヘ 江添** 羽咋郡宮木院に屬する部落。

**エソホ 越會保** 承久三年注進の能登國田數目録の鹿島郡に、越會保四反とある。

**エタ 穢多** 加賀藩では穢多是革多の別稱であるから、隱坊は藤内であるが穢多ではない。金澤に於ける穢多の祖先は、播磨から下つて來た左衛門五郎で、前田利長高岡在城の頃、役儀として皮革を上納し、加賀・能登に於ける皮剝の特權を許されたものである。子孫河北郡下淺野領に居住して、甚太郎・九兵衛二人がその支配をしてゐた。又越中は戸出